

日本国際ボランティアセンター会報 / トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

Trial&Error

コラム 援助の腐敗は細部に宿る

コラム 深刻なイラクの小児がん

プロジェクトの現場から

みるよむきく - 拡大版 -

プロジェクト一覧

国内ひろば



《特集》 南アフリカ

— 変革をになう草の根の女性たち —

<南アフリカ> かぼちゃの収穫 (写真: ピクター・マトム)



《特集》

南アフリカ

— 変革をになう草の根の女性たち —

南アフリカ事務所代表 津山 直子

アパルトヘイト時代から民主化へ、そして自分たちが主役になる社会づくりへ。南アフリカの草の根の人々と活動してきた津山直子(南アフリカ事務所代表)が、この国の変革を担う女性たちの姿を紹介する。(編集部)

民主化十年目の 現実のなかで

◆ 年金の行列で凍死する老人

南アフリカの七月は寒い朝が続く。東ケープ州で寒さの中、年金をもらうために並んでいた老人が亡くなった。夏の炎天下でも数人が亡くなっている。トイレも水もないところで、早朝から列をつくって何時間も待たなければならぬ。一日待ったあげくに来るはずの係員が来ない時は、帰ってまた来る交通費もなく、その場で寝ることもある。

南アフリカでは企業年金がない老人(黒人の大半はそうである)は、六十五歳以上に月七百ランド(約一万円)の年金が国から支給されている。これは、老人一人が食べていくのに、なんとか足りる金額ではある。だが、農業が衰退し、失業率も高い中、多くの家庭ではこれが唯一の収入となっている。おばあちゃんやおじいちゃんが、具合が悪いのを押しても(まさに手押し車に乗せられてくる人もいる)年金を取りに行かなければ、子ども、孫ひ孫、家族みんなが飢えることになってしまう。

そんな七月のある日、ジョハネスバーグから五百キロほど離れたフリーステート州の白人農場で働く親戚(夫のいとこ)が亡くなった。ちょっとした口論から農場主に銃で撃たれたの

だ。被害者は素手である。ところが、白人農場主は逮捕されるどころか、事情聴取もされていない。駆けつけた夫が警察に抗議に行っても「ここは、あなたが住む都会とは違うんだよ」と言われ、いとこの家族も農場から追い出されることを恐れて、黙っていた方がいいと言う。長年白人農場で働く家族は、そこを追いつけられると行き場がないのだ。

◆ がんばる草の根の女性

南アフリカは今年民主化十年目を迎えた。あつという間の十年だと感じる人々がいる反面、十年前と変わらぬ、あるいはそれよりひどくなった貧困の中に生きる人々にとっては、長い十年であったといえるだろう。経済的にも政治的にも、アフリカの大国としてイニシアティブを取ろうとしている南アフリカであるが、黒人人口の大半はいまだにアパルトヘイト時代と変わらない厳しい生活が続いている。

そんな中、JVCは貧困地域の住民によって担われているCBO(Community Based Organisation)への支援を続けている。アパルトヘイト時代と違って政治的弾圧を受けることがなくなり、ほとんどが住民のボランティアで運営されているCBOは、各地で地道な活動を続けている。アパルトヘイト時代には、一丸となって民主化を求めていた黒人住民であるが、現在は「自分の地位や金、『白人並み』の車や家」を第一に考える人が増えている。そんな



▲ 収穫 (写真: ピクチャー・マトム)

JVCが共に活動するそんな女性たちの何人かを紹介したい。

な中で、現在も「互いに助け合い、働いていこう」とがんばっているCBOの人々は、この国の草の根による変革を担っているといえる。特に多くの女性たちが活躍しているが、そういった活動の積み重ねがあって、初めて底辺に生きる人々の生活が変わりうると思う。



津山 直子 (つやま なおこ) :
反アパルトヘイト運動の中で92年にJVCに参加。一貫して現場に身をおき、地域に根を張って草の根の活動を展開している。

「この子どもたちが 幸せをくれる」

ピンキー・ムタンボさん

ジョハネスバーク市近郊のオレンジファーム地区は、新しい黒人居住地区として約十五年前につくられた。「オレンジファーム」という名前は、ここが以前は白人農場地域だった名残である。人口は急増し、現在約百万人が住む。ここに、テボホ障害児ホームがある。この地区には公立の障害児ホームはなく、障害児のケアは住民のボランティアによって支えられている。

テボホの創立者で代表のピンキー・ムタンボさん（四十七歳）は言う。

「一九八六年に息子が警官に銃で殴られたのが原因で、脳に障害が残った。息子を世話するために、それまで働いていた白人地域の障害者ホームを辞めなければならなかったの。そして、自分が住む地域では、障害を持つ子どもが十分なケアがないままに放置されていることに気づいたのよ。そんな子どもたちの世話を始めると、今度は病院や警察から、障害があるために捨てられた子どもが連れてこられるようになった。九人を養子にしたけれど、子どもたちの数は増える一方なので、九二年に



このホームを始めたの」「テボホ」はツワナ語で

「感謝」という意味である。貧しくても少しずつ食料を分けてくれる地域の人たちに感謝してつけた名前だ。古いトタンでつくったピンキーさんのバラックが「ホーム」となった。

JVCがテボホに出会ったのは九六年。六十人の子どもが一つの部屋のなかで所狭しとベッドや床に寝ていて、数個しかないお皿とスプーンで順番に食事をしていた。ピンキーさんはそこで二十四時間生活を共にしながら、地域の女性たちとともに子どもたちの世話をしていた。JVCは、薬や寝具、台所用品などの必需品、介護や施設運営の研修、NPO登録、宿舍建設と、ホームの運営が安定するよう支援をしてきた。

「宿舍の建設は私たちの夢だった。それに、施設が整ったことで州政府から子どもたちの食費補助金がもらえるようになり、やっと安心して毎日が送れるようになったの」

現在、五十人の知的障害児が生活し、そのほとんどが身体障害も持っている。「この子たちを毎日世話しているのは大変なことですね」と言う訪問者の言葉に、「私は大変だと思ったことはないです。この子たちは私に幸せをくれるから。寝たきりで話せない子ども、表情で気持ちを伝えてくれるのです」と言う。

ピンキーさんは、「どの子ども私の子ども」という、黒人社会の文化そのもののような存在だ。

テボホ障害児ホーム 滞在記

原田 恭子 / 東京事務所南アフリカ担当

テボホ障害児ホームの様子を知るため、一日滞在してスタッフや子どもたちと一緒に過ごす機会を得た。

ここには五十人の子どもたちが生活している。寝たきりで一人では食事ができない子や車椅子の子がいれば、自分でシャワーを浴びることができ

る子、外で簡単なボール遊びができる子もいる。障害の具合は様々だ。その中には、親に捨てられた子、親が死んでしまった子も多い。愛情を独り占めたい子どもたちは皆甘えん坊。歌って、踊って、楽しませようとしてくれる子、離れると泣きだす子、抱っこをせがむ子、叩いたりつねったりして愛情表現をする子、甘えたいのだけれども、素直に近づけない子……。いろいろな子どもがいる。

子どもたちの一日は、朝五時から始まる。スタッフに手伝ってもらいながらトイレに行ったり、シャワーを浴びる。全く起き上がれない子どもは、スタッフが体を拭き、オムツを換え、着がえをさせる。朝ごはんは白トウモロコシ粉のおかゆだ。昼間は皆フジオに合

子もいる。

夜は皆、いつの間にか眠りにつく。子どもたちが怖がらないように気づかなくてか、電気は消さない。それでも、子どもたちの泣き声や奇声は一晩中やむことがない。

子どもたちの面倒を見るスタッフは十六人。昼夜交代、一日中休む間もない。本当はリハビリや教育にも力を入れたいが、現在は生活の世話で精一杯の状況だ。政府からの補助金が出るようになったが、給料に充ててはいけないという規則があるため、彼女たちはJVCなどからの寄付金で月七千円だけを得ている。物価が高い南アフリカで、これで生活するのは厳しい。それでも、「子どもが好き」と笑顔をやささないスタッフたち。そんなスタッフの愛に包まれて、元気に過ごす子どもたち。このホームがとても身近に感じられるようになった。



「農民としての自信と誇りを持てた」

ノピレディレ・ジャンデラさん

JVCが東ケープ州カラ地区で環境保全型農業プロジェクトを始めて三年目になる。アパルトヘイト時代の土地収奪や出稼ぎ制度により農業が衰退し、自然破壊が進んでしまった地域で、環境を保全し、食料生産を向上させることが目的である。また、厳しい環境だからこそ自然を「コントロールする農業ではなく、自然の力を最大限にいかし、その恩恵を受ける」「自然農業」の実践が成果を生んでいる。

◆「畑のつくり方」教えて

カラ地区ローマ村の住民グループ「ザネンブラ」(コサ語で「雨をもたらす」という意味)のメンバー、ノピレディレ・ジャンデラさん(五十五歳)。三年前に自然農業研修に参加した後、少しずつ実践を深め、今では年間を通してほぼ自給できるようになった。彼女の家には、以前にも増して近所の人々の訪問が増えていた。ジャンデラさんの畑を見て、自分もまねしてやってみたいという人たちが。



ジャンデラさんがやっていることは、お金や特別なものはいらないので、やってみようと思えば、だ

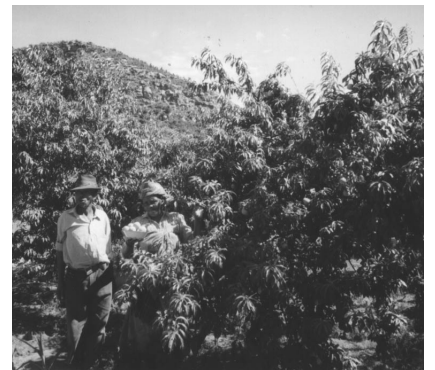
れでもすぐ始められる。

「大切なことはまず土づくり。最初に土を乾燥や大雨から守るためにマルチ※注一をするのよ。そして、家畜や鶏の糞※注二を利用してたい肥をつくる。そう

だ、新しくつくったコンポスト・トイレを見てよ、人間の糞尿※注三まで土に返せるんだから。この雑草を水に浸けておくと、その液が虫除けになるの。雨が少なくて、雨水の通り道をよく観察して、畑の脇にため池やたい肥サークル※注二をつくれれば、雨水を保水できるの」と、多様な野菜や穀物、果樹が育つ自慢の畑と一緒に回りながら訪問者に説明する。たい肥サークルは、JVCが配布したポスター(絵と現地のコサ語で描かれている)を見せながら説明する。そして、実践を始めた人の畑を訪ね、アドバイスを情報交換をする。自信がない時は、毎月村にやってくる自然農業専門家のティムさんに相談する。

◆他の村人にも伝えたい

ジャンデラさんのような農民は、「バイオニア農民」として、村での自然農業普及のキーパーソンになっている。村人は、百の言葉より、他の村人の成果を信じる。カラ地区の活動でも、最初は「水がなくて乾燥しているから農業ができない。JVCはまず井戸や灌漑※注四をつくる支援をすべきだ」という意見が村人から聞かれたが、同じ条件にある隣の人がいい畑をつくり、



▲ 自慢の畑で夫と桃の収穫作業

収穫が増えているのを見て変わってきた。農民の自然や農業実践に対する観察力は鋭く、成功している農民の畑を見て、それを自分なりに工夫して実践する。

ジャンデラさんの自慢は、「自家製の種と桃の木」。「野菜の収穫後にいくつか残しておいて自家製の種を採取するの。この地域に合っている種だから強いし、たくさん種が採れば近所の人にあげたり、売ったりできるからね。桃の木は、畑の自然のバランスが良くなったのか、虫の害にあわなくなったよ」。食べきれない桃は、シロップ漬けにして、近所の人に売るといい収入になる。

「自然農業を通して、農民としての自信と誇りを持てた。それを他の村人に伝え、お役にたてれば幸せだよ」と笑顔で語ってくれた。

とはいっても、もちろん大変なことも多くある。冬場は雨が降らず水も涸れてしまう。牧草地に草がなくなるので、牛や羊などの家畜が畑に入ってく

る。苦労して育ててきた作物が一瞬のうちになくなってしまふ。また、村の学校の先生が、「学校の畑は、できの悪い子に罰としてやらせている」と言うように、農業に対する意識がネガティブで、農業の大切さや楽しさをわかってない人も多い。

◆仲間が集れば、元気がわく

そんなことで落ち込む時も、月一回の「自然農業ワーキンググループ(実行委員会)で他のメンバーと話合ったり、また元気がでくる。このワーキンググループは、九村からのバイオニア農民、ティムさん、現地NGOのカルサ、JVCが参加し、自然農業普及に関する活動計画を立て、各農家の実践を継続的にモニタリングしたり、活動の成果を評価する役割を担っている。

「ワーキンググループで、実践していることや問題を共有できるのがいい。最近では、他の村を訪問し学びあったり、自分の畑にない種類の種や苗があれば交換したり、買ったりすることもあるし」と話すジャンデラさん。不思議に「バイオニア農民」には夫婦仲がよく、互いを尊重しながら、うまく協力しあっている家庭が多い。ジャンデラさんたちも、とても仲のよい「ご夫妻である」。

※注一 マルチ 干し草などで土を覆うこと。
※注二 たい肥サークル 直径二メートル、深さ六十センチの穴を掘り、草や生ゴミなどの有機物を入れる。その穴の周辺に野菜や木を植える。

Let's fetch water ! (水を汲みにいこう!)

飯山 みゆき / JVC アフリカボランティアチーム所属、
大学院での現地調査のため、カラ地区にのべ10ヵ月滞在。

カラの町から車で
五十分ほどの、山
上の村に二週間泊
る機会があった。こ
の村には電気も水道
もない。雨水を溜める
タンクを持つ家庭も
少数あるが、多くの
人びとは、生活用水
を村のはずれの小川
に頼っている。

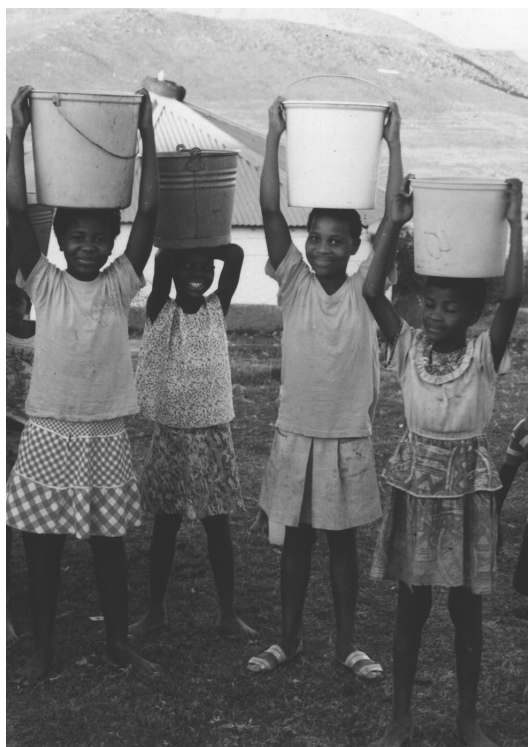
でも、それは小川
と呼ぶのもはばから
れる程、細く弱い
濁った水の流れてあ
る。冬になって乾季
に入ると小川の水量は激減する。
そんな小川でも、村人にとっては
貴重な生活用水源だ。

朝と夕方、数度に渡って水を汲
みに行くのは、女性と子どもの仕
事。夕方、おばさんたちが、水汲
みに行こうと誘う。ベンキを買った
時の容器を再利用したポリバケツ
を手に、岩だらけの谷へ向かって
歩いていく。おばさんたちは、よご
みから水を汲んでバケツに水を満
たし、慣れた手つきで頭の上に乗
せる。しかも、一度バランスをと
ると、頭の上に水の入ったバケツを
乗せたまま、手放して歩くことが
できるのだ!

私も真似しようとしたが、水の

入ったバケツは何と重いだろう
か。頭に乗せようものなら、バラ
スをとるどころか、首の骨を折っ
てしまいそうだ。しかも、あたりが
薄暗くなると、周辺の岩場
で足の踏み場を見つめるのさえ大
変だ。私はついに断念、その後は予
備の一回り小さなバケツに水を半
分満たしたものを両手に抱え、ヨ
タヨタと登り道を歩いていくしか
ない。

水道のない村に泊って、水の貴
重さが骨身にしみた。こんな大変
な作業を担っているアフリカの女
性たちに、本当に脱帽する。ちなみ
に、彼女たちは五十キログラムく
らいのものなら、頭に乗せて運ぶ
ことは日常茶飯事であるという。



▲ みんなで水汲み!

寒い夜に火を囲む人々

小林 恭恵 / JVC 南アフリカ・環境保全型
農業担当、カラ地区に住んで約半年になる。

南半球に位置する南
アフリカは今、冬の
真っ只中にある。日本
にいると、火を身近に
感じることは稀だが、
ここにいると、毎晩お
世話になりっぱなしの
灯油ストーブからも、
またカラの人々の日常
からも、火は欠かせな
いものだと思感させら
れる。

先日、カラから車で
約一時間のところにある、インド
ウエの農場に宿泊する機会があつ
た。畜産の講習会があつたからだ。
初日の講習が終了し、寒さが迫つ
てくる時間になって、人々がまず

したことは、火を起すことで
あった。

乾燥させた牛糞(ごうふん)を燃料にして、
たくさん穴を開けた大きな鉄の
缶に火をともし、各自がヒーター
を持っていないので、野外の大き
な火を大勢で囲むのだ。南十字星
が頭上に輝きだしても、人々はす
ぐには眠らない。ろうそくの明か
りで夕食を準備する女性がいて、
外で火を囲むたくさんの顔は、皆
オレンジ色に照らされ、たくさん
の笑い声が重なっていた。吐く息
が白くなっても、人々のおしゃべ
りは止まらない。

私は一足先にベッドに戻ったの
で、人々がいつまで寒空の下で談
笑していたのかはわからない。翌
朝七時に目が覚めた時は、一面
真っ白の霜。太陽の光はまだ差し
ておらず、朝もやがゆっくり流れ
ていた。

にぎやかな夜の残像は、静かな
朝に、私の胸にのこった。今もはつき
りと、火を囲む人々が目に浮かぶ。
ゆっくりと動きだした女性たちは、
朝の入浴のためにまた火を焚き、
太陽が山から顔を出すと、人々は
火のそばから陽だまりに場所を移
す。彼女たちが朝食の準備を始め、
男性たちは羊をえさ場に連れ出し
た。こうしてまた一日が始まって
ゆく。

「教育に一番大切なのは子どもを愛すること」

ブトゥメロ・セハレさん

古いタンでつくった小さなフラックが立ち並ぶフラックフオンティン地区。そこにあるインクルレコ小学校では、子どもたちの歌声が朝礼で響き渡る。授業が始まると、隙間だらけのトタンの教室は子どもたちでぎゅうぎゅう詰め。教室は二つしかないため、低学年と高学年に分かれ、低学年の部屋には二百人の子どもたちがいる。ここの壁、あっちの隅と担任の先生の周りに子どもたちが集まっている。

校長先生のブトゥメロ・セハレさん（二十九歳）。一九九六年に教員養成学校を卒業したが、人種別だった教育省がちょうど統合される時期で、新規採用はすべて見あわせられていた。

「公立学校のないフラックフオンティンで住民が自主学校として始めたインクルレコ小学校のことを聞き、ここに引越してきたの。電気はなく、数少ない水道やトイレを共同で使うから生活は思っていたよりずっと大変。でも、給料は出なくても、子どもたちを教えられることがうれしい」

そんな先生たちを支えるのは父母や



住民たちだ。先生に少しはお金が出せるようにと、毎月住民からお

金を集めたり、学校運営に積極的に関わってきた。

「この子どもたちは、シングルマザーやおばあちゃんに育てられている子が半分以上。最近はいすにより親が死に、子どもたちだけの家もあります」。アパルトヘイト時代の出稼ぎ制度は家族を分断したが、貧困であればあるほど、現在でも安定した家庭を築くのがむずかしい。

「複雑な家庭だと問題を持つ子どもも多いですが、子どもを愛し受け入れれば、心を開いてくれます。教育に一番大切なのは子どもを愛することだと思います」とセハレさんは言う。

他のスラム地区からの移住政策で、人口はこれまでの三倍の一人人になり、公立学校もつくられることになった。「公立学校ができることはうれしいが、政府は新しい先生を連れてくるという。子どもたちを理解し、献身的に教えてきてくれたセハレ先生たちを雇用してくれるよう政府に陳情に行ったが、どうなるかわからない」と、学校運営委員会代表のクズワヨさんは寂しそうに言う。

「コミュニティが大変なときに共に住み、共に学びの場をつくってきたセハレさんと十四人の先生たちは子どもや住民にとってかけがえのない存在である」。

「HIVポジティブでもポジティブに生きる」

ググ・ドラミニさん

「I'M POSITIVE」と大きく書かれたTシャツを着て、HIV（エイズウイルス）感染者への薬の保障を政府に求めるデモの中に、ググ・ドラミニさん（二十歳）もいた。

「十四歳でレイプされ、妊娠し、HIVに感染した。レイプされた時に銃で頭を撃たれ重症を負い、手術の後三週間昏睡状態が続いた。奇跡的に回復したけど、その後妊娠とHIVのことを言われ、目の前が真っ暗になった。でも新しい命はやっぱり『喜び』。だから、赤ちゃんに『ルンギレ』『喜び』という意味」と名づけた。でも、その子が母子感染でHIV陽性だと知って…。何重もの苦しみで涙も涸れてしまった」



中学生でシングルマザーになったググさんは、お母さんの助けを受け娘のルンギレちゃんを育てていたが、そのお母さんも数年前に亡くなった。「エイズだということで親戚にも差別され、居場所もなく死にたいと思った。けれど、しばらくして、自分と他のHIV感染者が堂々と生きられる社会にしたい、そのために自分

そして、カウンセリングと訪問介護の研修を受けた後に、自分が住むジョハネスバーク市北部のテンビサ地区で、仲間とともに「イググレッツ（ズール語で「誇り」という意味・サポートグループ）をつくった。「HIV／エイズ感染者が主体的に生きられるよう助け合い、生活を良くしていく」ことを目的に活動している。

グループのオフィスも兼ねているググさん母子が住む小さな部屋には、HIVに感染しているとわかった人が毎日何人も訪れ、ググさんのカウンセリングを受ける。「黙ってはいません。自分がポジティブ（陽性者）であることを公表し、他の人と助け合い、悩みや喜びを共有することで初めて、ポジティブ（積極的）に生きることができるようになるのよ」と話す。

南アフリカでは、毎日六百人もがエイズで亡くなり、妊婦の二五％以上がHIVに感染している。仲間もググさんもいつ体調が急変するかわからない。いつも何か大変なことが起こる中での活動なので、私もググさんから電話がかかってくるたびにドキッとする。

「一番つらいのは仲間の死。十分な治療を受けられないまま死んでいく。それにお金がなくて、自分も仲間もその日の食料が買えないような時があること。夢は勉強をして高校卒業資格を取る事なの。レイプと妊娠で学校を辞めなければならなかったから」

援助の腐敗は細部に宿る — 政府とNGOの関係 —

高橋 清貴 (東京事務所 調査研究担当)

◆おねだりするNGO

六月下旬、自民党でNGOと議員が対話する会合があった。自民党は最近、様々なテーマでNGOとの意見交換会を定期的に行なっている。このときのテーマは、国際機関とNGOの連携であった。朝八時にもかかわらず、総勢百名も集まった。開発協力型NGO、国際機関の駐日代表、外務省幹部、議員や多数の秘書が顔を出し、NGOへの「関心」の高さを示していた。

ブッシュのイラク戦争終結宣言から約一カ月、会合での話題は当然イラク復興における国際機関とNGOの連携に集中した。驚いたのは、国際機関から一通りの説明が終わった後のNGOからの質問の時であった。ジャバン・プラットフォーム※で中心的役割を担っている某NGOの代表が、米国政府が国際機関に出した拠出金の多くを、米国NGOが受注していることを指摘して、「私たちが日本政府の援助射撃が欲しい」と発言をしたからだ。

大義なき戦争に対して、復興であってもNGOとして関わるべきかどうかという議論をしてきたJVCにとって、戦争に加担した政府の支援を受けることすら憚られることなのに、国際機関に拠出した金を日本のNGOにまわるように配慮してほしいと臆面もなく言うことに自分の耳を疑った。これではODAに群がる商社やコンサルタントと同じではないか。

同席していた私は、同じ「日本のN

GO」として恥ずかしくなってしまう。この某NGOの発言が自民党議員の「私たちも頑張らなければいけない」というコメントを引き出し、同席している外務省に対して、「もっと日本のNGOの意見を聞くように」という圧力に変わっていった。

◆自己正当化の落とし穴

ここに、今の日本のNGOのあり様と、政府が援助の「内向き化」を進める思考でNGOを取り込もうとする様子を垣間見ることが出来る。NGOが国際機関からの受注に苦勞しているという事情は理解しているが、透明性やアカウンタビリティについての認識を欠いたままで、権力に阿って支援を受けたいという甘えは許されるものではない。援助が内向き化している情勢では、そのような発言や行動は、日本の援助の改善を遅らせ、市民社会すらも弱体化させることになるからである。

多くの現場型NGOは、「現場のニーズに応えるために、今は組織として大きくなり活動を広く展開することが重要だ」というリアリズムの立場に立っている。彼らにとって「NGO」というラベルが社会にどう受け止められるか、それを政治家や財界がどう利用しようとしているのかということはこの次の問題である。「NGO」という言葉の使われ方まで含めて、広い社会的役割の観点から自らの組織のあり方を再考する暇はなく、現場活動の一点に正当性の根拠を集約させて、組織拡大

と強化という「行動原理」を導き出して自らを納得させている。

現場活動の拡大は、人道面からいえば必要なことかもしれない。しかし、同時にそのような人道支援を必要とする状況を変えるために社会に何らかのインパクトを与える活動をしていかに限り、マッチポンプであり、人びとの苦しみをマーケットとする「援助ビジネス」と批判されても仕方がないのではなからうか。組織拡大は構わないが、同時にその過程において、政府や自民党とどういう関係を持つか、またその結果として貧困や紛争に苦しむ人びとを生み出す構造にどう影響するのかが、もっと考慮があつてしかるべきである。ひとつの正当性で自らの行動のすべてを肯定する自己批判性のなさに、言いようのない恥ずかしさと共に、NGOが自ら衰退していくであろう危険性を感じてしまうのである。

◆対話と想像力

私は、NGOは市民を代表するものではなく、社会をできるだけ透明性のあるものに変え、権力を持つ側に説明責任を果たさせ、多くの市民が自ら様々な場所で、様々なレベルで参加を確保できる「民主的」社会の実現のための触媒的役割であると考えている。組織という「壁」を乗り越えて、いかに多くの市民と協力していけるかがNGOの強みなのである。

市民活動のアドバンテージは、何よりもその創造性と行動性にある。想像

力と行動力で、想像もできなかったような社会の改善をやってしまう。それを市民が受け入れる。そこに市民運動の力の源泉と正当性があるのではなかったか。政府の支援を受け、自民党の「援護射撃」をもらうことで、NGO活動を「予見可能」な範囲に留めてしまう危険性はないのか？ 活動の正当性を資金提供してくれる政府が行なってくれることに安住して、市民に理解し、支持してもらうために自ら説明し、報告することを怠ってしまうことはないのか？

「NGO」(非政府組織) というラベルは、市民によって与えられる一つの「称号」という重みを思い返す必要がある。その場合のキーワードは「対話」である。かつて、「NGO」という言葉が市民に認められていなかった頃、支援のお願いをするために足繁く市民の中に向いては報告会を行ない、意見交換を行なってきた。そうすることで「NGO」という概念を市民との対話の中でつくってきた。

二十一世紀に入り、日本でも国際社会でも大きく情勢が変わろうとしている今、改めて「NGO」という意味を問い直す必要があるように思う。政府との関係のあり方も、その問い直しの中、すなわち自らの「対話」の中で自ずと浮かび上がってくるであろう。

(たかはしきよたか)

※注 ジャパン・プラットフォーム 国際緊急援助のため、政府と経済界、一部のNGOで構成する政府の資金の受け皿と配分機関

深刻なイラクの小児がん

井下 俊 (徳島県立海部病院^{かいふ}内科医長)

イラクの医療状況を調査するため、六月十八日から二十六日まで、各地の病院や難民キャンプを訪れた。医療関係者や患者の方から話を聞き、状況の深刻さに胸を打たれた。

◆小児の悪性腫瘍が八倍に

イラク南部のバスラ周辺における白血病などの小児悪性腫瘍の発症数の推移と、マンスール教育病院の小児悪性腫瘍の患者数のデータを得た。バスラ地区では、九〇年と比較し〇二年には小児悪性腫瘍患者数は約八・四倍に増加しており、マンスール教育病院でも小児悪性腫瘍患者数は九四年の約五倍に増加していた。小児悪性腫瘍の大半は白血病であり、バスラでは小児白血病は湾岸戦争前の約五・七倍と著しく増えていた。日本での統計と比較すると、〇二年のバスラでの小児白血病での死亡率は、およそ日本の約五倍程度と推測される。

この数字の検証にはカルテの再調査など必要だが、私が視察した限りでは(訪れた三カ所の小児がん専門病棟で約四十名の小児がん患者が入院中)、入院患者中三歳以下の乳幼児が多く含まれている印象があり、またバスラでは街中で抗がん治療を受けていると思われる小児を見かけることがあり、小児悪性腫瘍の罹患率^{※注}(特に乳幼児間での)は高い可能性があると考ええる。また、バスラでは先天奇形の発生率が九〇年には一千出産あたり三・〇四で

あったが、〇一年には二二・一九まで増加している。

抗がん剤がこの六カ月程不足していたため再発症例が多数あったとの話も聞いた。現在は各団体の寄付により、基本的抗がん治療はできているが、特殊薬に関してはまだ手に入らない状況にある。また、がん治療専門病棟でありながらその衛生状態は極めて悪い。その原因としては、電力などのインフラが現在十分でなく、水の供給が悪いといった影響もあるが、看護師不足に加え、診断治療のための設備もほとんどなく、不十分な状態で治療にあたっていることがあげられる。同時に、失業者が多く、収入の途絶えている家庭が多く、患者家族の経済力という問題も大きな壁として立ちはだかっている。

◆病因としての劣化ウラン

小児悪性腫瘍および奇形出産の増加の原因として、湾岸戦争時に使用された劣化ウラン弾の関与が指摘されている。医師としては、他の原因(フセイン時代の化学兵器の残留など)も否定するものではないが、原因としては非常に有力な説だと考える。劣化ウラン弾は使用時に微細な粒子となり攻撃地点を中心に残存し、粉塵^{ふんじん}や食物を通して容易に人間の体内に侵入する。体内に侵入した劣化ウランは低レベルの放射能を照射しつづけて、白血病を発症させたり、あるいは成長過程の胎児細胞に障害をもたらす先天奇形を発生させる可能性を持っている。科学的に劣化ウランと小児悪性腫瘍の因果関係を証明するには、白血病患者や死産に終わった胎児の体内の劣化ウラン量の測定に加え、浮遊粉塵・水・作物・家畜などに含まれる放射線量の測定が必要なのだが、私の視察した限りにおいては、現時点で公的機関による調査は行なわれておらず、劣化ウラン問題そのものが放置されている印象を受けた。米軍は今回の戦争でも劣化ウラン弾を使用したことは認めている。しかし、その量・使用地区などは明らかにしていない。新たな劣化ウランの被害を未然に防ぐには、現時点での汚染状況の調査と啓発が必要であるのだが、どの機関が責任をもっているのかも不明であった。

◆放射能汚染調査を早急に

イラクの一般人の間で放射性物質に対する認識は低い。バグダッド南約三十キロメートルのマフマディヤートでは中心街に今回の戦争で破壊された戦車が放置されており、子どもたちが部品を取ろうとしたり、その上で遊んだりしていた。この戦車は、日本のジャーナリストがガイガーカウンタ(放射線検知器)をあてて、高度に放射能に汚染されていると思われるものである。

また、現在イラクではストリートチルドレンが増加しており、彼らが劣化ウラン弾により破壊された家屋や戦車をねぐらにしている可能性もある。さ



▶イラクにおいて、白血病の治療は大変困難だ。

らには劣化ウラン弾により破壊された建造物の除去作業の際、劣化ウランを含んだ粉塵が多量に巻き上がる可能性があり、それを吸引した作業員および周辺住民が被爆^{はいばく}することになりかねない。

劣化ウランによる汚染状況を明らかにせず放置しておけば、今回の戦争での劣化ウラン弾による被害者が今後も増えつづける可能性があり、早急な公的機関による放射能汚染調査と啓発が望まれ、可能であれば除去活動も開始しなければならない。これは、現地で働かねばならない人道援助従事者や兵士(自衛隊員も含め)にとっても重要な問題である。

(いのしたとし)

※注 罹患率 病気になる確率。

パレスチナ

小林 和香子

子どもたちのサマーキャンプ

六 月の終わりにパレスチナ全土が熱波に襲われた。夜になっても室温が三十度を下らない。

小学生は六月上旬に夏休みに入。でも、難民キャンプの文化センターは六月下旬までは開店休業。普段面倒を見てくれるボランティアのお兄さん・お姉さんたちが高校卒業試験や大学の試験で珍しく(?)忙しいからだ。

彼らの試験がようやく終わり、文化センターの子どもたちのためのJVC支援のサマープログラムが七月六日にスタートした。しばらくかまってもらえなかった子どもたちには、待ちわびた夏の「イベント」の開始だ。

熱波のピーク、ついでにハムシーン(砂嵐)に見まわられた中でのスタートにも関わらず、初日の絵画教室には四十五人、二日目には六十五人と、小学生を中心にわんさか文化センターに詰め寄ってきた。そして五日目に計画しているプールへの遠足には、現在九十五人が申し込んでいる。

パレスチナの子どもにとつ

て、プールは特別である。なにしろ、イスラエルに水資源がコントロールされているため、パレスチナ側では水が不足している。プールの数も限られているし、料金も彼らにとつては高額である。ましてや難民キャンプへの水の供給は限られており、夏の間は週に二日しか十分に水が出ない。そんなことから、キャンプからバスに乗っていくプールへの遠足は貴重な経験となるだろう。さまざまなプログラムの対象の多くは小学生以下だが、ボランティアとして高校生が面倒を見てくれている。最初はどういうふうしているボランティアも見受けられたが、大学生のリーダーたちに支えられ、今後は毎回のワークシヨップのボランティアたちの役割分担もはつきりし、より組織化されていくだろう。このように次世代リーダーたちの教育もしっかり行なっている。サマープログラムは八月末まで。これから本番。まだまだ子どもたちの暑い夏が続く。

プロジェクトの現場から

ア

フガン人にとって客をもてなすことは生活規範の核心をなしている。初めて会った人にも自然にお茶を勧めるし、昼食を勧められて断るのに苦労することも度々である。またアフガン人は、外国人に対して、二言目にはアフガニスタンに来てくれた客だから大切にしなければいけないという。「アフガニスタンに支援に来てくれてありがとう」とも言う。

初めはこの言葉に感動したものだが、最近はそのたびにアフガン人との距離を感じる。あなたたちは客だという言葉は、あなたたちは外部の人間だから敷居を越えてはいけませんよ、というニュアンスを言外にもっている。

このように自分たちの社会空間に境界を設けようとするのは、イスラム社会の特徴でもあるだろうし、アフガン社会の特徴でもあるのだろう。その一方で、彼らが客だと思っていた外国人がアフガニスタンの言葉を話すと、「おやおや?」という顔をする。アフガン人と客の関係に一瞬の変

化が生じるようである。「おつ、パシュトゥー語ができるのか」と素直に喜ぶのである。

外部から来た私たちは客には違いないが、客だ客だと言われているにもかかわらず、前に進めない。少しでもこの境界を崩すには、言葉ができるようになるしかない。

言葉。しかし、これがなかなか身につかない。理由の一つは、ここジャラバードでは二つの公用語であるフアルシー語とパシュトゥー語の両方が混在していることである。

初めは東部地域で優勢なパシュトゥー語を勉強したが、ある時思い直してカブールや他地域で優勢なフアルシー語に切り替えた。しかし、最近になって東部地域での活動が新たに始まったので、地元の人々の信頼を少しでも得ようとパシュトゥー語を勉強し直している。この優柔不断が災いしたか、パシュトゥー語は恐ろしく複雑な言葉であるが、せめて日常会話の中だけでもアフガン人の輪に入り、「境界」に穴を開けたいと思う。

アフガニスタン

谷山 博史

JVCは「外国のお客様」?

■分科会①

復興支援とNGO

「復興支援とNGO」分科会では、アフガニスタンやイラクなどの紛争後の地域で、NGOがどのように貢献できるのかを考えました。

まず東ティモールで活動していたスタッフの体験談を聞いた後、「復興支援」のイメージを確認するためのワークショップを行いました。国としてのシステムやルールを再生する復興の過程には、インフラ、教育、行政、治安維持（または回復）などたくさんの方が必要なのだとわかりました。

その後のディスカッションでは、復興とは何かについて、また、NGOの役割について等々、さまざまな意見が出ました。一つの国の復興すべてにNGOが携わるのは難しくとも、復興のさまざまな要素を小さなユニットに区切って見ていけば、できることがあるはずという意見がありました。

その国の人たちがその人たちが自身の国をつくるために、NGOはどのような支援ができるのか、復興に求められるものがそれぞれの国で異なっている中で、イラクやアフガニスタンの現地スタッフの試行錯誤が感じられる分科会でした。

（会員 梁田直香）

会員総会後の交流会

「JVCのつどい」開催!

2003年6月14日、交流会「JVCのつどい」が開催されました。年に1度、会員が集まる場を生かして交流会が開かれるようになってから、今年で3回目です。今年も恒例の音楽生演奏あり、テーマ別分科会ありで、充実した3時間でした。入会間もない会員の方から「遠方から参加したかいがあった」とうれしい感想をいただきました。



▲分科会の企画・運営にも会員の方々が活躍

■分科会②

NGOと政府の関係

「NGOと政府の関係」分科会では、クイズ形式で現在の両者の関係や今後の展望について話し合いました。自由回答も続出するなど、参加者の熱い思いがひしひしと感じられました。

まず第一問を通して、現在のNGOと政府の関係の概要をつかみ、その後第二問で「今後どのような両者の関係が望まれるのか?」、第三問で「両者が望ましい関係を築いていくためにJVC（私たち一人一人）はどうあるべきか?」と進み、活発に意見が交わされました。

NGOと政府の望ましい関係を表すキーワードは「緊張関係」と「協調関係」。ストレートに意見を言い合い、その上での対話ができる関係、相互批判が可能な関係が前者であり、お互いの持っているもの、持っていないものを認めた上で協力・補完し合っていく関係が後者です。

JVCにできることとして、NGOと政府のやりとりに関して、一般の人が関心を持てるようなPRをマスコミ等と協力して行なう、具体的な対策についてNGOと政府とのやり取りがわかるもの（議事録等）をJVC会員にも共有する、会員も日頃から政策に関心を持って自分で情報収集する、などのアイデアが挙げられました。

（会員 坂本智子）

■分科会③

JVCの村落開発

「JVCの村落開発」分科会では、

①なぜJVCは村落開発に取り組むのか、②なぜ日本から遠く離れた南アフリカ共和国（以下南ア）でそれを行なうのか、という点について考えることが大きなテーマでした。

まず、はじめに南アについての簡単なクイズに答えていただいたあとで、南ア事業担当の原田さんより南アについての説明があり、その後四つのグループに分かれて作業をしました。各グループで、南アが抱えている都市と農村の問題をそれぞれ話し合っ、カードに書き出してもらい、そのカードを白い紙の上に貼っていき、出てきた多くの問題がどのように関連しているのかを考えました。

農村と都市はとても密接なつながりがあり、都市の問題を根っこ部分から解決していくには農村での取り組みが重要であるということ、そして南アの問題の多くは実は日本でもみられるものであること、など興味深い結論が導き出されました。

参加者の皆さんが熱心にそして協力的に参加してくださったことが非常にありがたかったです。欲を言えば、もう少しスタッフと会員の方がじっくり話し合う時間を持つことができればさらによかったと思います。

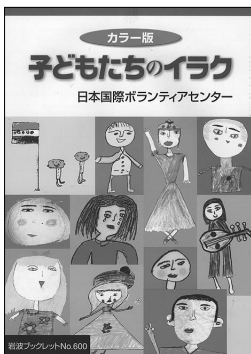
（会員 増田岳文）

みる よむ きく - 拡大版 -

JVC の活動が本になりました！ JVC 理事・横川 芳江

世界中の人々の反対の声を聞かずにイラク攻撃が行なわれ、今はゲリラ戦の様相を呈しています。そんな中、日本は自衛隊のイラク派兵を行なおうとしています。私たちはあきらめることなく、「平和」について一人一人が知り、考え、行動することが必要です。

ちょうど、岩波書店から JVC の活動に関連するブックレット『子どもたちのイラク』、『地雷と人間』が出版されました。ともに JVC の「平和」への取り組みから生まれたもので、まさに今、多くの人々に伝えなければならない情報が詰まっています。



『子どもたちのイラク』は、中東代表の佐藤真紀を中心に吉野都、高橋清貴が執筆したもので、不安定で厳しいイラク国内で人々がどう暮らしているのか、JVC が絵画を通して交流していた子どもたちの状況など、その時に現場にいるからこそわかる様子が伝えられています。

爆撃で割れたガラスの掃除から活動を再開した病院で新しい生命が生まれた。一生懸命に生きようとすると子どもたちがいる。その姿を伝える執筆者の温かい思いが伝わってきます。

やさしい語り口の文章と鮮やかなカラーの絵画や写真で構成され、大変読みやすいものになっています。ページをめくると子どもたちのメッセージが伝わってくるでしょう。

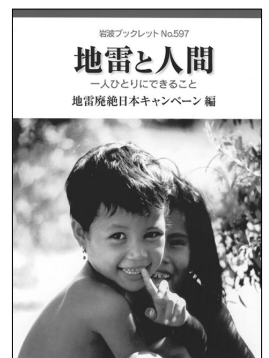
『子どもたちのイラク』

文・写真：佐藤 真紀 岩波ブックレット No.600 岩波書店刊 600 円＋税

「オタワ条約」成立に至るまでの過程や、世界と日本の動き、また、地雷以上に悪魔的な「クラスター爆弾」など、新たな課題にも触れられています。地雷に関する全ての情報が詰まっています。「地雷ハンドブック」として必須の一冊です。

『地雷と人間』は、JVC が構成メンバーとなっている「地雷廃絶日本キャンペーン」が、これまでの活動をまとめたもの。JVC 事務局長でもある清水俊弘や北川泰弘さん、目加田説子さんの共著です。JVC の活動地であるカンボジアやアフガニスタンの現場での状況も伝えられています。

なぜ地雷が「悪魔の兵器」と言われるのか、なぜ無くなれないのか、それがしっかり書かれています。また地雷だけではなく、その裏側にある開発の問題や貧富の差の実態などもわかり、JVC が目指す NGOとしての取り組みも理解することが出来ます。



『地雷と人間』

文：清水 俊弘、北川 泰弘、目加田 説子 岩波ブックレット No.597 岩波書店刊 480 円＋税

NGO は戦争の尻拭いを行なうのではなく、戦争を起こさないための「平和」への取り組みが大事だと JVC は考えています。情報を広く知らせることが、「予防」への最も大きな取り組みといえるのではないのでしょうか。

まず知ること、考えること、そのことが「市民力」を蓄えます。地雷廃絶の運動は NGO や個人の熱意が政治家や国家を動かした市民力の表れでした。これらのブックレットは「平和」への取り組みに力を与えるものになるでしょう。必読です。

※ JVC でも取り扱っています。御希望の方は JVC 中山まで。(TEL・03-3834-2388 FAX・03-3835-0519 E-mail・ikuko-n@jca.apc.org)

《開発協力》

タイ

Thailand

地場の市場づくり

ボンの町で行なっている直売市場「むらとまちを結ぶ市場」の委員会から、広報のためにスピーカーを購入したいとJVCに支援の申請があったが、きつぱりと断った。それを受けた委員会は、これまで八カ月の間、委員会が市場の販売者から活動維持費として収集してきた一区画五バーツの場代が六千バーツに貯まっていたので、その基金から拠出するという結論を下した。JVCは金銭的援助が目的ではないはずである。(松尾)

北タイ調査

北タイのビルマ国境近く、フアーン川流域で、住民組織の環境保全活動を支援する活動に向けての調査が一段落した。現在はその計画書をJVC内部で検討中である。(木村)

農村で学ぶインターンシップ

五月にタイに来たインターン八期生の四名は、ノンジョク自然農園で六週間派遣前研修を受けた。タイ語研修、開発についてのオリエンテーションのほか、農作業として草刈り、アヒル小屋づくり、たい肥づくり、耕起、キノコ栽培、野菜の収穫など…。六月末、それぞれの派遣先に旅

立った。これからが本番！

(森本)

カンボジア

Cambodia

持続的農業と農村開発(SARD)

昨年の不作が響き、例年より早く六月からコメ銀行を開く村が始めた。しかし、今年は雨が早めに降り始めたため、昨年のように苗代に被害が出ることはないだろう。また、活動地の少なからぬ農民が、幼苗一本植えや、伝統品種や緑肥の利用など、さまざまな試みを導入し始めた。(余部)

資料・情報センター(TRC)

図書館利用の新規登録者数が伸び続けている。六月五日には環境デーのイベントに参加し、図書館のPRと出版物の販売を行った。他の図書館との出版物の交換や、図書の寄付もあった。アジア財団が、同財団の情報センターの資料として、TRC出版物を全種類購入した。(余部)

技術学校

ブノンペンとシアヌークビル両校の自動車修理コースの二年生と溶接コースの生徒が、整備工場での実地研修を開始した。両校とも七月末に卒業試験、十月に入学試験を予定している。卒業予定者のうち、十一人はすでに就職が内定した。ブノンペン校は、宣伝強化に努める。シ

アヌークビル工場は、経営改善策として、港工場を貸し出す、水代節約のため深井戸を掘る、などを実施。(米倉)

調査研究・政策提言

トンレサップ湖周縁の漁業共同体の運営実務に役立つ小冊子をつくることになった。他県を視察したリーダーを中心に、関連する法律や政令、漁業共同体の目的・運営方法などをまとめる。

土地調査は、カンボジアNGO「CEDAC」と協働で、五月から地方調査を始め、タケオ県とブレイヴェン県を終えた。日本大使館・NGO・JICA・JBIIC定期協議会に向けて、カンボジア視察中の民主党議員六人に対してODA改善策について提言。(米倉)

ラオス

Lao

自然農業と農村開発(ビエンチャン)

先日、プロジェクト地のある村から果樹栽培トレーニングの申し込みがあった。村人のほうからトレーニング提案を受けたのは初めてであった。そこで、村人が今後も自分たちでトレーニングを企画・運営できるよう、村人と話し合いながら企画を進めようとした。ところが、田植えで忙しい時期と重なってしまい、十分な話し合いを持つことができないままトレーニングの日を

迎えてしまった。トレーニング自体は、果樹栽培に精通した村人が先生になって実施したこともあり、終始活発に意見が出て有意義なものとなった。ただ、トレーニングの運営能力をつけるという意味では、反省点が残った。(川倉)

森林保全と自然農業(カムアン)

ナীব村では三年前に企業が進出してきて、八十三ヘクタールもの土地に村人によって植林が行なわれたが、現在までその賃金が支払われず、一部の村人が植林を囲う柵を持ち去ったという問題が発生した。警察、企業、村人の三者で話し合った結果、村人が多額の弁償金を払い、労働は無償と、村人に厳しい判定となった。この植林にはADB(Aジア開発銀行)が絡んでいるが、こういった植林が今後ますます拡大していく中、現場から声を発していくために他の例も含めて注意深く実態を観察していく。

三年前にノンブー村で池の掘削代を支援した。今年五月がその支援金の返却期限であったが、魚が思うように成長しなかったことや米が不作などの理由で返却されなかった。村人は借金は帳消しにしてほしいと提案してきたが、JVCはこれを断り、むしろ二年返済を延期した。(中村)

ベトナム

Viet Nam

ハノイ事務所

JVCのような国際NGOがベトナムで活動するには、政府からの許可が必要だ。JVCは一九九六年に、活動期間や外国人スタッフのビザなどでもっとも優遇される「代表事務所」の認可を得ている。昨年十月、二度目の更新手続きを開始したのだが、その署名が執り行なわれたのは六月二日であった。現在、代表事務所の認可を得ている団体は四十六、そのうち日本の団体はJVCのみである。(西)

自然資源管理(ソンラ)

住民自身による自然資源管理の活動を支援しているコマ村の対象三集落で、六月中旬、各五ヘクタールの共有地にケシアマツ他、五千本余りの苗が植えられた。これまで植林の習慣がなかった住民が、植林技術や共同管理を実習する場として期待される。この活動は地元『ソンラ新聞』でも紹介された。

下旬には森林管理モデル地への研修旅行を実施し、二十一名の集落住民が参加した。日程の合間に、海を見に行った彼(彼女)らは、初めて見る海に感嘆の声を上げていた。(田村)

農村開発(ホアビン)

JVCの活動地、ムオン族が居住するクイッチェン村では、

七月後半に豚銀行を実施する。これまで他の活動村では、会計管理の経験がないことによる問題が生じていた。そこで、村づくり委員会メンバーが帳簿のつけ方などについて学ぶために、マイクロ・クレジットの活動をしているフート省の村で農民研修を行なった。(伊能)

南アフリカ

South Africa

農村開発

東ケープ州カララ地区で、環境を保全しながら食料生産の向上をめざす自然農業を実践している。年間を通して畑を使うように、主作物の白トウモロコシの後の冬季作物として、小麦やオーツを栽培する二毛作を奨励している。干ばつがひどく土が乾いているが、耕さなくても発芽率がよくなる「シードボール(たい肥、粘土、種をまぜて土団子をつくる)」を試みている。また、冬場は果樹や防風林の植林を行なっている。(津山)

子どもの教育支援

ジョハネスバーク市郊外の貧困地区で住民により運営されているインクルレコ小学校では、これまでブラック小屋を教室に使っていたが、日本大使館の草の根無償資金を得て、現在八教室+トイレの建設を行なっている。教室の一つは、図書室として活用する計画で準備を進めて

調査研究・政策提言

十月に東京で開催されるT I C A D III (アフリカ開発会議) の南部アフリカ地域会合が五月末にプレトリア市であり、政府、国連機関、NGOなどが参加した。日本のNGOとしては津山が参加した。八月三、四日には東京でNGOシンポジウムを開催する予定。(津山)

《緊急対応》

イラク・ヨルダン

Iraq・Jordan

緊急支援

六月十八日から二十六日、JVC佐藤、吉野看護師らとともに徳島県の井下俊医師(内科・血液病学専門)を派遣した。バグダッドのマンズール教育病院、赤新月社母子保健病院、およびバスのイブン・ガスワン病院を訪問し、白血病など小児悪性腫瘍に関する医療状況を調査した。劣化ウラン弾との関係性が疑われているこれらの疾患は、湾岸戦争以降明らかに増えているが、子どもの大半は十分な治療を受けられていない。バグダッドでは、家を追われ市内の運動場でテント暮らしをしているパレスチナ家族のための病院に、検査機器などの支援を実施。また、バグダッドのアル・カーク総合病院とラマ

ディの母子病院に対して、医薬品および外科消耗品を支援した。(佐藤)

絵画交流

七月五日から十六日、ボランティアの石垣聡子と沢田有以子、バグダッド市内の文化教育施設で交流活動を行なった。音楽バレエ学校では、沢田がピアノで日本の歌を紹介したり、「We are the world」を子どもたちと一緒にアラビア語で合唱した。石垣はアラビア語で日本の子どもたちからのメッセージを紹介した。今度はイラクの子どもたちの夢を日本に紹介する。(佐藤)

パレスチナ

Palestine

難民キャンプ平和図書館(ベツレヘム)

ベツレヘムの Beit Jibrin 難民キャンプの文化センターでは、JVCの支援によりサマープログラムが七月六日より開始した。プログラムの目的は子どもたちの芸術性や知的好奇心を高めること、何かに熱中し楽しむ機会を提供すること。期間は八月末までの約二カ月間。図工教室や音楽教室、チェス大会やクイズ大会、サッカートーナメントやプール、さらに締めくくりにして、子どもマガジンの発行など多様だ。参加対象は小学生が中心。(小林)

アフガニスタン

Afghanistan

東部地域医療支援

昨年度実施した巡回診療活動の経験を踏まえ、今後は①地方クリニックと②女性医療従事者養成コースを当面一年間支援していく。治安の急変にも対応できるように、活動の地域を複数にした。

資器材や薬品が不足している地方クリニックに必要な物品や薬剤を供給、併せてスタッフの職能向上トレーニングを実施する。女性医療従事者養成では、日本のODAで新校舎が建設されている養成コースのうち、他のNGOが支援していないアシスタント医師コースと歯科医コースについて、教育器材や備品、訓練生の文房具を援助。また村からの通学、外部実習時のためのマイクロバスの供与を検討している。(本間)

シグ高等女学校支援調査

二十年以上女子教育を担ってきたシグ村の高等女学校の校舎増設支援に向けて、調査を継続する。学校支援を通して村の女性のニーズと可能性を把握し、女性のグループ活動に結びつけるのがねらい。(本間)

地雷回避教育支援

昨年度、協働した現地NGO「OMAR」が実施している地雷回避教育を支援する。具体的に

は、アフガン女性が指導する活動の件費や教材などを支援。(本間)

コリア

Korea

今年で三年目を迎えた「南北コリアと日本のともだち展」が、七月九日より一週間、渋谷の東京都児童会館で開催された。例年の三倍近くにのぼる三百八十点あまりの絵が展示され、期間中に開催されたワークショップにも、絵を描いた子どもたちや関係者が多数参加し、実際の交流を深めた。また、韓国から参加した子どもたちは日本の小学校や朝鮮学校も訪問した。(寺西)

《国内活動》

広報

昨年度、ホームページを全面リニューアルしたのに続き、今年もよりわかりやすくするため、新しいページデザイン・読みやすい内容を検討している。現在、アクセス数は一日三百ほど、一カ月で一萬程度になる。インターネットを利用して募金が振り込まれることもある。(荻野)

会員登録

「ひめじ発世界」24

「ひめじ発世界」

創立十周年を迎えて

△兵庫△ 洪沢 文生^{ふみお}

国際ボランティアグループ

「ひめじ発世界」は、播磨地域のJVC会員や関西でのJVCの支援活動の中で出会った社会人や主婦、学生が集まって十年前に発足しました。グループの名前は、地域から世界に伝えたいとの思いでつけました。私自身は、もう十八年近く前、学生時代にJVCのタイのイサーン地域での井戸修理のワークキャンプに参加させていただいて以来、JVCと関わっています。

私たちの活動は、JVCの現地スタッフの報告会やひめじ地球市民教室という学習会を開き、「知り、考える」ことから始まりました。JVCスタッフだったエチオピア人の方を姫路城を案内したこともありまして、こういった活動を通して、私たち自身の暮らしが世界と強く、深くつながっているにも関わらず、あまりにも「知らない、知ろうとしない」ことが多いと感じてきました。

一方でここ播磨地域には、イ

ンドシナ難民の定住センターがあった関係でベトナム人やラオス人、近年では、南米を中心としたニューカマーとよばれる外国人が多く住んでいます。そういった足もとの国際化が迫られる中で、外国人への支援として、「多言語の医療相談会」や外国籍の子どもたちのための「多文化こども会」等の活動を行なっています。

今年度は、十周年を迎えたということで、先日、記念のイベントを開き、熊岡代表に講演をお願いし、「世界の紛争と地球市民」というテーマでお話していただきました。小さな会でしたが、JVCの会員を中心に参加があり、戦争のもたらす問題について改めて考える機会となりました。その際に、地方で暮らす会員にとっては、JVCの活動を身近に感じる機会としてこういった会を年に一度は開いてほしいとの要望がありました。今後、「ひめじ発」としてもそういった機会を提供できるような協力したいと思っています。



国内ひろば

イベントレポート 第四回 会員総会

六月十四日(土) 東京

JVCの第四回会員総会が、東京都豊島区の豊島区民センターで開催されました。当日は会員とスタッフを合わせて八十名以上が出席しました。

午前中は出席者数が総会成立のための定足数に達していることを確認後、議長、議事運営委員などを選出し、二つの議案の討議に入りました。第一号議案は〇二年度の活動と決算の報告、第二号議案は〇三年度の活動計画および予算案です。質疑応答では、会員のみなさまから様々なご質問・ご意見が出されました。

・「他団体より潤沢な繰越金の規模を適切だと思いませんか？」

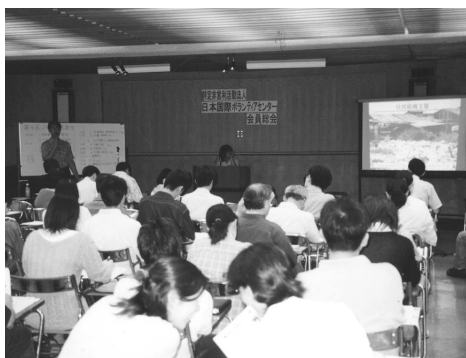
・「JVCは何を代表して活動しているのか？」

・「イラク攻撃反対運動は、現地を知るNGOの報告があることで盛り上がった。今後是非戦の立場で活動を続けてほしい」

また、JVCの理事や監事からも熱の入った発言が飛び出して、予定を三十分以上延長する充実した時間となりました。活発なやりとりの後、第一号、第二号議案ともに承認されました。

また、総会後回収したアンケートにもさまざまなコメントをお寄せいただきました。昨年度はヨルダンやイラクなど中東での活動が始まったため、中東プロジェクトの予算に比較して決算が大幅に増えました。この点に関してある会員の方から、「大幅な予算オーバーの場合は補正予算を組み直し、理事会の承認を受けたうえで会員に報告すべきでは」というご意見をいただきました。これを受けて、JVCではどのようなケースで補正予算を組めばよいのか、ガイドラインを作成することになりました。JVCの運営も含め、活動全体に会員のみなさまの意見が反映されるよう、今後も努めていきたいと思っています。

(会員担当 中山 郁子)



※今後の交流会「JVCのつどい」については本誌十ページをご覧ください。

JVCカレンダー2004、早期申込キャンペーン中!

～ 同封のハガキで10月末までにお申込みいただくと、アジア・アフリカのポストカードセットを無料でプレゼント!～



1部 1500円(税込)

“子どもたちのアフガニスタン”

写真：長倉洋海

毎年ご好評いただいている JVC 国際協力カレンダー。
2004 年度の受付が始まりました。

紛争下に生まれ、混乱の時代を力強く生きてきた
子どもたちの表情で12ヶ月がつづられています。

「女の子の笑顔がかわいい!」

「こんなに緑豊かな国なんてびっくり!」

と早くも話題です。

詳しくは同封のパンフレットをご覧ください。

募金をありがとうございます

JVC の活動は皆さまの募金で支えられています。

① JVC 募金

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495 加入者名：JVC 東京事務所

5月計 5,054,802円 6月計 2,115,579円

	5月	6月
タイ	7,000円	100,000円
カンボジア	10,000円	0円
ラオス	55,000円	14,000円
ベトナム	1,000円	1,000円
エチオピア	0円	0円
南アフリカ	51,000円	50,000円
パレスチナ	74,000円	7,000円
アフガニスタン	1,529,230円	291,000円
北朝鮮	5,000円	0円
無指定	436,900円	707,565円
緊急：イラク	2,885,672円	945,014円

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497 加入者名：犬養道子「みどり一本」

5月計 297,100円/41名 6月計 322,500円/36名

③ JVC サポート募金

5月計 88,000円/70名 6月計 89,000円/71名

お問い合わせ：岩間邦夫 (iwamak@jca.apc.org)

JVC 連続講座 2003

もう一つの 生き方を 学ぼう

今年で五回目の連続講座。今年は外部の講師の方も多く迎えて、「紛争・貧困を生む世界の構造」NGO活動・自分自身にできること」を幅広く学べるようにプランしました。JVCのイラクでの平和活動・カンボジアでの

村人主体の活動からスタートして、ODAの問題点、アジア・アフリカが物質的に貧しくなってしまう世界の構造を学びます。そして最終回は市民派ジャーナリストによる「世界の見方」。政府の農業援助を見直すに至らせた市民グループの話もあります。

(広報 荻野 洋子)

■日時：2003年9月3日(水)～11月26日(水)の
隔週水曜日、19:00～21:00 / 全7回

■会場：文京シビックセンター

■参加費：9000円(非会員の方は10000円)

■定員：50名(先着順、会員向けの特別枠あります)

■申込締切日：8月末日

■問い合わせ/申し込み：

TEL・03-3834-2388 FAX・03-3835-0519

E-mail・jvc@jca.apc.org (荻野)

暮らしを彩る道具 64

LIFEWORk ITEMS

Viet Nam



酒ガメ

カメにドロブクを仕込み、ストローで。甘く、女性も好む。
(南部の山岳民族マノンの人々の村で / 中井 幹雄氏撮影)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

ご入会は、次の口座へ郵便振替にて会費をご送金ください。

口座番号: 00150-3-48365
加入者名: JVC 会員係

オリエンテーション(説明会)へどうぞ

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30
第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
※会場はJVC東京事務所です。

会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら(会員担当)へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数【7月28日現在】 合計 1,652人
(正会員 560人 賛助会員 1,092人)

E-mail

jvc@jca.apc.org

JVCのホームページ

<http://www1.jca.apc.org/jvc/>

編集後記

どんな仕事でも、それが「好き」でないとなかなか長続きしないものかもしれませんが、NGO活動も、自分の中にはっきりした動機が必要ようです。

そこで、8月中旬の週末、JVCの東京スタッフは合宿を行ないました。ワークショップで「自分がなぜNGOで活動しているのか」「JVCで何を実現したいか」そして自分の(個人的な)目標に向けての「自分プロジェクト」をつくりだす。…楽しみ&苦しみ…。(荻)